

山家の絵描き、元アイドルタレントの習字の先生、毎年、二科展で入選している切り絵女子等々、多彩でマーガレット作りはアクティブシニアの楽しみにもなっています。

マーガレットの挿し芽苗は毎年、伊豆農業研究センターや地元生産者から約二十品種を譲り受け、大鉢と小鉢で三百鉢程度栽培し、河津桜や菜の花が咲く時期に無料展示しています。

皆さん、伊豆にお出掛けの際は、南伊豆町道の駅「湯の花」やマーガレットの会ギャラリー「みいづ」など、御覧ください。

「農業法人化と人材不足」

小笠支部長 中田義廣
〔昭四十三講習所卒〕

昭和一桁世代がリタイヤされ、世代交代が進み生産構造も経営者マインドも変革しています。

一点目に、農業法人化が著しく進捗している中で、県農業法人協会員の最大の課題は、労働力不足です。農業法人の雇用は、JA、公的機関の斡旋、農の雇用事業の活用、海外からの研修生の受け入れ、パートや農林大学校の卒業生など多様です。特に、経営者からは、

農林大学校の学生は、基礎から応用まで確かな知識と技術や経営管理まで学び、即戦力になると高い評価を得ており誇れることだと思います。

直近では、新聞などで報道された障害者雇用の水増し問題です。いかなる事情があるにしても、官民とも法定雇用率を守る義務があります。

本県のK農業法人は、従業員のうち障害者の割合が約三割を占め、生産から収穫・出荷調整まで適材適所で働き、健常者の従業員が手助けするようになりコミュニケーションが弾み、職場が明るく相乗効果が生まれている事例もあります。農作業は、園芸福祉、園芸療法に適し、障害者の社会参加への効果もあり、農業の多様な担い手として裾野が広がり、農業の価値観・存在感を多くの方々を知ってもらいたいのです。

二点目は、農業は儲からないと言われますが、高収益を上げている農業法人が多く見られ、経営者は魅力ある産業だと捉えています。これら法人の特質は、時代の要請を先取りする豊かな感性、IT技術革新が進む中、新しい技術導入や全てのしがらみを断ち切る決断力があるように思えます。

農林大学校は、二十二十年四月の開学を目指し農林環境専門職大(仮称)に移行すべき準備が進め

耕土耕心

第26号

平成31年
1月15日

編集・発行

静岡県立農林大学校
同窓会

〒438-8577
磐田市富丘678の1
電話
0538-36-1564

新生大学への移行と 同窓会組織の拡充

会長 岩倉和之介



一昨年に続き昨年も、気象動向は波乱にとんだ年となりました。

西日本を中心とした記録的な大雨は二百二十人を超える犠牲者を出し、その直後からは一転して列島が太平洋高気圧とチベット高気圧に覆われて、埼玉県では四十一・二℃と国内最高記録を更新する結果となりました。

加えて、本土に上陸した台風は平年の二倍を超え、中でも二十四号台風は、本県の農業被害額を五十九億円にまで上らせました。

犠牲者に哀悼の意を表しますとともに被害を被った皆様には一日でも早く復興され、経営基盤面で安定することを願っております。

さて、会員の皆様には、会報二十五号等を通して御承知のとおり、農林大学校は二十二十年の四月から専門職大学に移行する方向にあります。これを踏まえて県から昨年十月二十五日、文部科学省に対して設置許可の申請が出されたところですが、

今、農林業は国内の担い手構造の変化やマーケットのグローバル化等に伴い、経営体の構造改革と生産現場の技術革新が必須要件となっており、

こうした時代の中で、本県が全国に先駆けて進める専門職大学への移行は、意義深い施策として受け止めております。今後は、開学に向け基本構想の理念にも掲げられている「耕土耕心」の校訓の基に、学生はもとより産業界にとって魅力のある高等教育機関として確立されることを

られています。本県農林業のトツプランナーとして、先駆的な役割を担える学生が輩出される教育機関として期待しています。

《新入会員紹介》 「がんばってしまおう」

池田真古都

〔平二十九農林大畜産卒〕
私の実家は酪農家ではありませんが、幼いころから動物には興味があり、牧場のような場所働きたいという思いから、農林大学校へ入学しました。そして畜産(酪農)を学び、卒業後は袋井市の太田牧場に就職しました。

太田牧場では、百五十頭前後の主にホルスタイン種の牛から牛乳を搾っています。その搾られた牛乳からソフトクリームやプリンなどに加工してお店で販売しています。また、自給飼料を生産していることも特徴です。

その中で、私は主に搾乳の仕事を担当しています。美味しい牛乳を搾るためには、まず牛のお乳を綺麗に拭くことから始まり、生き物である牛は毎日出る牛乳の量や質も異なり、体調もその日によって違うので、そんな変化にも気を付けながら搾ります。搾乳はとても繊細な仕事です。ほかに除糞や飼料の運搬で、ホ



イルローグーやダンプなどの大型機械に乗ることがたくさんあり、とてもいい経験です。

太田牧場という大きな現場で働く中、分らないこともたくさんありますが、学ぶことが多く本当に刺激的な毎日です。

酪農は決して安全な仕事といえる訳ではないですが、私にとってはとてもやり甲斐のある仕事です。これからも美味しい牛乳を生産するために、精進していきたいと思えます。

人事務局からお願い
住所変更、訃報等の連絡は各支部長または支部役員までお願いします。

創立百二十周年に向けて

農林大学校長 滝田和明



年間四百三十人。昨年度県が策定した経済産業ビジョン(農業・農村編)における、四年後の新規農業就業者の目標値です。

今年度の養成部入学者は、三分の二以上を農林業関連高校出身者が占めています。当然、卒業後の就職する者の割合が高く、例年八割前後の学生が農林業関連企業を中心に就職しています。

農業法人等への就職者に自営を含めた就業者は卒業生の半分程度で、昨年度は四十六人でした。若手新規就業者を輩出する県内唯一の機関として差し支えないでしょう。

こうした本校への農林業関連企業の期待は高く、十一月まで二百六十社以上から求人情報を頂きました。ありがたい限りですが、



期待しております。私たち同窓会は、これまでに一次産業に係る多くの人たちとの輪を作ってまいりました。しかし、世代を越えての交流には限られたものがあります。そこで二年前から組織の縦軸を強化するため、卒業生の代表者に情報伝達の役割を担ってもらい、活性化への道筋をつけることとしました。

新生大学発足後は、学生の層がより幅広くなるのが想定されますので、世代ごとに人材を配置して、会の活力に結びつく組織づくりを果たしたく思います。会員の皆様の御理解とお力添えをお願いします。

この状況を根本で支えているのが二か月間の先進経営研修への御協力にほかなりません。

今年度も九十人の学生を八十三の経営体で引き受けていただきました。多くの同窓生の方にも御協力を頂いており、この場をお借りして御礼申し上げます。

県では再来年度の専門職大学移行を目指しておりますが、「耕土耕心」の理念の下、農業の担い手を育成する機関であることに揺るぎはありません。校舎等教育環境の充実に努めますが、先進経営研修のような学外実習の重要性が一層高まります。

本県農林業のますますの発展に向け、同窓生の皆様には、これまで同様温かな御支援、御協力を賜りたくお願い申し上げます。

《特集》

「専門職大学への移行に向けて」

県農業ビジネス課 専門職大学整備室長 佐野一弘



時下、ますます御清栄のことと喜び申し上げます。また、皆様には、日ごろから本県農林業行政に御理解・御協力を頂きまして、誠にありがとうございます。この場をお借りして、厚くお礼を申し上げます。

さて、前号の同窓会報でもお知らせしましたとおり、現在、県では、農林大学校から専門職大学への移行に向けた準備を進めております。平成二十九年五月に、県内の農林業経営者や高校関係者、県内外の有識者の皆様に構成員とする検討委員会を立ち上げ、およそ一年半にわたる審議を経て新大学の基本計画を取りまとめました。昨年十月に、この基本計画に基づく大学設置認可申請書を文部科学省に提出いたしましたので、今回は、その設置認可申請の概要についてお知らせいたします。

はじめに、新大学の名称は、「静岡県立農林環境専門職大学（仮称）」とし、現在の農林大学校と同じ場所に、農林業経営のプロフェッショナルを養成する四年制大学（一学年二十四人）と生産現場のプロフェッショナルを養成する二年制の短期大学部（一学年百人）を併設する予定です。

農林業経営や生産の現場で必要とされる知識・技術と併せて、地域や生産現場のリーダーとして活躍できる豊かな人間性を備えた人材

の養成を教育目標としており、実習や演習を重視したカリキュラムにより、農林業現場で活躍するための実践力を養うとともに、一年生は原則全寮制とし、共同生活を通じて協調性やコミュニケーション能力を高めるなど、これまでの農林大学校の伝統と「耕土耕心」の精神を引き継ぎながら、将来の本県農林業現場を支える人材を育成することとしています。

なお、大学の名称に「環境」とあるのは、農林業について学ぶだけでなく、自らが農林業を営む農村地域の景観や環境、文化などについても学び、地域の発展に貢献できる農林業者の養成を目指すことを示しています。

現在は、このような設置認可申請の内容について、文部科学省の大学設置・学校法人審議会の審査を受けているところであり、審査の結果、申請が認められれば、本年八月末ごろに正式に認可される予定です。

今後も、農林業分野では全国初となる専門職大学の設置認可に向けまして、大学設置・学校法人審議会の審査に対応してまいりますとともに、学生募集や施設整備など、開学に向けた準備に全力で取り組んでまいりますので、皆様におかれましては、引き続き、温かい御支援をお願いいたします。

《学校の話》

海外派遣研修報告

教務課養成班主幹 渥美剛

同窓会の皆様には、日ごろ本校の教育に多大な御支援、御協力を頂き、ありがとうございます。

本年度のオランダ派遣研修は、九月二十二日から十月一日までの十日間にわたって実施され、十九名の学生が参加し、天候にも恵まれ、全学生が体調を崩すことなく研修することができました。

本校と姉妹校協定締結のウエラ



コン、携帯電話持参で外国との距離は感じなくなってきたが、外国の地から日本を見ることが、より日本を知ることになり、貴重な経験をすることができました。

《支部だより》

「町の花マーガレットに囲まれて」

賀茂支部長 金子勲
【昭三十六講習所卒】

マーガレットは、昭和六年に南伊豆町伊浜の段々畑で栽培されたのが始まりで、昭和四十〜五十年代は全国一の産地と言われました。花言葉は「真実の愛」です。

そんな関係で、南伊豆町民憲章に「マーガレットのように美しく清らかな町をつくりましょう」と謳われています。

私は、前々から町の花であり名産品でもあるマーガレットを、もっとPRして南伊豆町を広く大勢の人たちに知ってもらいたいと思っていたので、道の駅「下賀茂温泉湯の花」内のガラス温室を町から借り受け、有志を募って十一年前に「マーガレットの会」を結成しました。

現在の会員は二十名で七十歳前後、芸術活動をしている町外からの移住者が多く、陶芸、草木染、エベレストの次に高い山に登った登

ントカレッジはオランダ最大の職業的教育学校で、オランダ全土に二十八の分校があります。訪問したハウテン校では、アニマルケア、フラワーデザイン、造園の授業（実習）を見学しました。

教務課研修班長 加々美裕

本年度の台湾研修は、平成三十年十月二十五日から三十日までの六日間で、昨年度よりも多い十六名が参加しました。台湾は晴天続きで、また思ったほど気温も高くなく、気持ちよく研修を行うことができました。

今年度は、台北周辺の農業経営者、桃園農業試験場等を視察し、台湾の農業について学びました。また、日本国産の台湾における食材や林産物の利用を学ぶため、台北の大手百貨店で開催された日本商品店やジャパンウッドステーション台北も視察しました。研修中は自由時間も設け、班別行動として自ら立てた計画に基づき、台湾の名所等を見学しました。

他国の農業や文化を知る機会として台湾派遣研修に参加した学生にとっては、忘れられない思い出となりました。



静岡県国際農友会の紹介

会長 長澤政幸
【昭五十七農林短卒】

静岡県国際農友会は、農業研修生海外派遣事業によりアメリカ、ヨーロッパ等で野菜、花き、果樹、造園、畜産等を学んだ者百六十五名で組織されています。

会員は、高校卒業後一年以上農